週刊新聞
直言

◎「新人」の國家宗教

木下尙江

△國家を議するの好機會

宗教が一代の勢力を有するの時は、必ず「國家的統一」の形體に於てす、歐洲諸國の基督教の如き、日本に於ける佛教の如き、皆な然らざるは無かりき、外觀は是れが爲めに壯嚴眞に人目を眩するに足るありと雖も、精神上の矛盾と狂屈とは、同時に其內面に於て腐敗墮落の種子を播きつゝあることを思はざるべからず、近時の日本に於て基督教は非國家主義の故を以て強大なる政權の下に壓伏せられたり、爰に於てか各派の基督教、皆な頭を低れ膝を狂げて「國家」の歡心を買ふことに汲々たり、而して教會財政に於て外國傳道會社との關係上尤も不羈の地位に在る組合教會は、國家主義と提携するか爲めに尤も自由の態度を執れり、即ち昨冬に於て同教會總會に於て「東洋の傳道は國家の[illegible]」を決議したるが如き、今日普通の政治思想たる「東洋の平和」國家の膨脹と伴行し得るものに非ずや、而して其組合教會の精神を尤も明白に代表するものを、海老名彈正君となす也、

「新人」は海老名君の主筆に成りて、其の「國[illegible]」[illegible]本年一月の雜誌[illegible]只だ[illegible]

△國家は終局の目的に非す

「新人」評して曰く

[illegible]のに非ず、即ち各個人は皆社會國家なる團體の一員として常に其團體の意志に統制指導せらるゝものなり、この各個人の內外一切の生活の最上の規範たる「國體」[illegible]國家精神又は國家魂と云ふ、[illegible]不羈獨立と求むることは用容れず、故に今こゝに各個人の上に在りて之を統制する一大意力ありとすれば、その意思は必ずや各個人共通の意思に其根底を有せざるべからざるや辯明を待たず……

是れ「國家」の哲理的基礎と其理想とを說明せるものにして、吾人が宿論たる民主々義の依つて建つ所なり　何の異議か是れあらん、

△然るに記者が直に筆を轉じて「故に現今の論壇に於て國家魂を目して君主若くは貴族の粹なりと爲すが如きは是れ甚しき謬妄の言なり」と論斷したるは何ぞや、若し法科大學の講堂に於て國家と君主とを混同するものあらば由々敷事件なり、然れ共現實社會に於て進歩せる國家の哲理的理解を有するものは比較的少數にして、[illegible]

此の如くにして『新人』の秀才が折角の國家哲論も國家的宗教論の爲に何等の補充をも爲すこと能はざるに了れり、いで直に大將海老名君の手元に參向して一言の批評を試みん、

△國家宗教の根本的謬誤

海老名君曰く『個人の佛陀あるは吾人之を聞く、國家の佛陀あるは吾人未だ之を聞かず、——個人の神子あるは吾人之を聞く、國家の神子あるは吾人未だ之を聞かず』と、又た曰く『吾人は日本魂を信ず、又宇宙のロゴスを信ず、神子帝國の實現を信ぜざらんとするも得ざるなり』と、英氣颯爽誠に古豫言者の餘韻あり、然れ共遂に無意義不論理の大言壯語に過ぎざる也、

△海老名君は日本を以て世界未曾有なる佛陀神子の國家的權化となさんとを理想せらる、然れ共是れ國家自身の本來として到底成す能はざる所也、個人は神子たるを得、國家は能はず、其故何ぞや、社會的大意思は元と各個人の心理に包藏せらる、或は現はれて「家庭」となり、膨脹して「國家」となり、更に發展して「世界」となり「四海同胞」となる、故に理性感情の開展發育極めて高明熱烈なるものは、「神子」の品性を實現すべし、耶蘇の如き、釋迦の如き即ち是れ也、然れ共「國家」なるものは社會的意思の發展史に於ける中途の段階にして、神子佛陀の大品性を實現し得べからざるは元より其所なり、耶蘇、釋迦の如きが最初より「愛國」の羈絆を脫却したる所以亦た知るべきに非ずや、

△然るに海老名君は日本を解するに不可思議なる心理的尺度を以てせり、曰く『日本魂は由來國家魂なりき、今や大進して世界魂ならんとす——吾人が世界魂と云ふ固より國家魂を輕視するの意にあらず、大國家魂の中には既に業に世界魂は潛伏し居る筈なり』と、『日本魂は國家魂なり』是れ吾人が數々愛國詩人等の歌謠中に見たる所なりと雖も、心理的論理的の研究に於て人生を理解せんとする場合に於ては全然無用の形容詞に非ずや、國家其物が人類意思の發現なるの理は『新人』の秀才が既に論じたる所の如し、世界魂は是れ人類共通意思の到達せずんば已まざるべき目的なり、是れ國家魂の中に潛伏し居るにあらずして各個の人魂中に最初より包藏せらる所のもの、吾人は海老名君が強て「日本魂は國家魂なり」と云ふ獨斷的前提を設くるの理を解すると能はざる也

不幸にして海老名君は日本を說くに「人」を單位とせずして「國家」を單位とせり、爰に於てか「國家」をして「世界」に發展せしめんと欲せば是非共戰爭征伐の途に依らざるべからざるの結論に到達す、然り、是れ海老名君の熱心なる戰爭論ある所以也、然れ共吾人は進で問はざるべからず、

（一）國家の內容を如何にすべきや、

國家的外觀の膨脹に對する海老名君の希望は略ぼ之を察し得べきが如し、然れ共世界的日本たらしむる今日の日本の有形無形の內容にて事足るや否や、

（二）基督教の神と、日本の主權者との關係に就ての說明如何

由來日本國民の主權者に對する、宗教的崇拜の情あり、一神教たる基督教が從來嫌忌せられしもの、其眞因こゝに在り、而して基督教徒も亦た可成避けて一に國民の憤怒を買はざらんことに努めたるもの、如し、然れ共既に基督教を提げて「神子帝國」を建設せんと欲するに當りては、先づ主權者に對する國民の宗教的崇信心に無事平穩の首肯を與へざるべからず、

（三）露國皇帝の希望との相違點如何

吾人の見る所を以てすれば、露國皇室積年の欲望も亦た海老名君等の希望と格別相異せざるが如し如何にや、

海老名君は余が師事する所の長者なり、『新人』の諸秀才は余が尊信する親友なり、只だ不幸にして思想の立地に於て一致せざるものあるが如し、一論ある所以なり、

THE CHOKUGEN.
(meaning 'speaking straight-forwardly.')
SOLE ORGAN OF JAPANESE SOCIALISTS.
Issued every Sunday.
Communications addressed to The Heiminsha,
Yurakucho, Tokyo.

Vol. II.—No. 2. Tokyo, February 5th, 1905.

WAR PRISONERS AND LABOURERS.

There are upwards of thirty thousands of Russian war prisoners now in Japan. It is the price of Japan to say that those prisoners are treated very kindly. Japan is making war against Russian Government but has no enmity towards Russian people as an individual. Why then should we not treat kindly those poor prisoners who are our brothers and neighbours? but it is very strange that while those poor foreigners are treated so kindly, there are innumerable half starved labourers in this country, who are more closely our brothers and neighbours, and for whose protection, it is said, the present war is being waged.

THE LABOUR HOURS AND WAGES OF PRINTERS.

According to the investigation made by the Metropolitan Police, the labour hours and wages of printers in Tokyo are as follows:—

Printing offices.	Number of labourers.	Labour hours	Wages
Shueisha (Main Office)	420	13	20 sen
Shueisha (Branch)	649	10	13
Teikoku Insatsu	144	13	28
Tsukiji Kappan	495	13	13
Kokkosha	165	10	19
Hakubunsha	262	11	18
Daresha	107	13	21
Tokagawa Bunsha	321	12	14
Miyako News Office	90	9	25
Keirako	65	9	20
Yao Kappan	85	10	29
Aizensha	82	10	33
Saukosha	55	9	35
Sanseisha	72	10	27
Kumata Kappan	93	10	29
Insatsu Kwaisha	58	11	20
Koshinsha	60	11	29
Saukyosha	80	10	24
Asahi News Office	68	10	25
Kokumin News Office	86	9	26
Hanunsha	97	11	29
Hokosha	52	12	22

One sen is just equal to half a cent of American money. Japanese books and news papers are produced by these long hours and low wages!

TRANSLATION OF "CAPITAL."

Comrade Abe, professor of the Waseda University, is now working very hard in translating the "Capital" of Marx. "Capital" is counted among the heavy reading even in Europe and America. Especially this is the case with the Japanese either in its German original or in its English translation. So Abe's translation shall undoubtedly prove, on completion, a great merit for the cause of socialism. It is expected that the translation will be ready for the market within the two years.

本紙は日本社會主義の中央機關也!!!

（電話本局三三六二番　平民社）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

內外時事

○露國革命運動の經過

▲▲▲▲▲▲露帝と職工總代　露帝は終に職工總代を引見したり、見るべし皇帝と雖も遂に人民の實力に屈從せざる可らざるの時あることを

露帝は二月二日[illegible]

[illegible]露國皇帝が職工を欺瞞し、彼退し、種々にして懐柔の策を講ぜること、然れども既に覺醒せる人民は到底其皆の甘言好餌に釣らるべくもあらざる也、果然彼は報じて曰く

[illegible]

▲▲▲▲▲ウイッテの改革案　露帝は一方に勞働者を慰撫すると同時に、終に其獨裁的制度の主義を棄てざる可らざるに至り、ウイッテの改革案を容れて大憲章を發布し代議院を創立すべしと報ぜられたり

[illegible]テレグラフ露都通信員の報に因れば、露國皇帝は去る月曜日(三十日)[illegible]大憲章とも稱すべき一勅令に署名したり、此勅令の[illegible]

[illegible]（ロイテル電報）

然れどもロイテルの後報は、更に其改革案の内容の縮少したる報導を爲せり

[illegible]

吾人は到底、露國朝廷の内部を詳細に想像すること能はず、而して之と同時に内務大臣ミルスキーは辭職し、前モスコー總督バリグニ之に代れり、蓋しミルスキーは比較的進歩せる自由主義の爲に今回の騷擾を惹起したりとの責に任じたるものが新内相は例の保守頑冥派の一人物なりと云ふ

▲▲▲▲▲露國貴族の活動　斯くて露國朝廷は外に日本に對して和戰の態度を決し、内人民に對して寬嚴の態度を決すべき地位に迫れり、此際に於て彼の保守派(モスコーの貴族等は、大いに其意見を發表して活動を始めたり

▲女公爵の不和議　露國の女公達は會議を催ほし、不和同盟の決議を爲し、倫敦駐箚露國大使に平和條件に關し英國の意を得置く可しとの訓令を受けたりと云ふ

▲露都の貴族會議　露都の貴族は二月六日會議を開き、一の上奏案を可決し、而して其上奏文中に於て[illegible]

[illegible]

▲▲▲▲▲擾亂猶絶ます　中央に於ける示威行動は[illegible]、露國諸地方に於ける擾亂猶絶えず、同盟罷工、暗殺、叛亂、殺氣紛々たるものあり

▲コサックと革命民衆　露國のストライキ運動は各方面に蔓延し、バツーム、南方コーカサス鐵道に於て[illegible]コサック兵と革命的民衆[illegible]激烈なる衝突ありたり

▲[illegible]　[illegible]ヘルシングフォース政務知事[illegible]

▲[illegible]　[illegible]

▲西比利亞の騷擾　西比利亞の騷擾は益々蔓延し[illegible]電信は停止せられ、警察憲兵[illegible]名は反亂を起せり

▲大學の休校　オデッサ大學は當分休校する事となれり

▲▲飛火　又もや飛火は佛蘭西と白耳義とに起れり、左の二報を見よ

▲巴里の同盟罷工　巴里に於ては、電氣工場の職工同盟罷工を起せり

▲白耳義の同盟罷工　白耳義の鑛山坑夫は同盟罷工を起せり

日本横須賀に於ける船渠會社の同盟罷工は必ずしも露國革命の飛火にはあらざるべしと雖も、革命の機運が歐洲の天地に溢れるとは實に疑ふ可らざるものあり

○政界變風の犠牲

神奈川縣の前代議士安藤淺太郎氏は去一日自宅に於て縊れ死せり

安藤氏は神奈川縣足柄上郡屈指の素封家なりしも數回の選擧[illegible]の選擧に多數の選擧費を費やし[illegible]

嗚呼是れ實に現時政界腐敗の犠牲となれる者にあらずや、吾人は曾て群馬縣前代議士新井毫氏が政治運動の爲めに産を破りて瀬戸の海に投じて死せるを見たり、而して數日前には愛知縣前代議士小室重弘氏が家賃を拂ふこと能はずして夜逃せる由を新聞紙に見たり、現時の政界に處して比較的正直なる者、比較的小心なる者の最後の運命は大抵如此くならざるなし、毎日新聞は能く吾人の言はんと欲する所を言ふ曰く

[illegible]

然り何人にても深く腐敗墮落に馳驅する數同ならんか、常に大資本家の後援を有し、若くは政府の保護を有し、若くは賄賂を取り居るに非ずんば、負債、落選、夜逃、縊首、入水は必然の結果也、黃金萬能、自由競爭、弱肉強食の社會に在ては必然の結果也

○是れ偶然の出來事なる乎

税務屬懐殺者の公判と題して左の記事、新聞紙上に現はる

▲[illegible]

▲[illegible]

酒造家は税法に違犯し、税務署長は收賄の發覺を恐れて自殺し、税務屬は賄賂を要求して殺さる、何等の淺ましさぞや、然れども是れ偶然の出來事なる乎否な、未だ自殺、兇行に至らずと雖も違犯と收賄は到る處に行はれ居れりといふにあらずや、今日の制度組織にして改革されざる以上は吾人は個々罪惡の根絶を望む能はざる也

○浦賀船渠會社の同盟罷工

浦賀船渠會社の機械工場の職工數百名は一人に付き賃金十五錢宛の増給を要求し去七日より同盟罷工を爲したるが會社側にては之を拒絶し、[illegible]の時に未だ決定を見ざりき、本年は世界各國同盟罷工の流行年なり、否な今後益々熾んに流行するに至らん

○浦和の消費組合

浦和在住の官吏は一昨年[illegible]消費組合を[illegible]

○[illegible]保護の義

[illegible]

○萬國社會黨運動一覽

今回萬國社會黨本部より發行したる「L'Organisation Socialiste et Ouvrière en Europe en Asie et en Amérique」と題する佛文の書籍は去年の萬國社會黨大會に提出せる歐、亞、米の各國に於ける社會黨及勞働組合の起源、歷史、及現在の形勢に關する詳細の報告を編輯せるものにして世界同志が運動の情状を一目の下に瞭然たらしむべき五百頁の大冊定價三法五十錢なり、希望者は 63 Rue Hegvaert, Bruxelles なる Le Secrétariat Bureau Socialiste International に宛て注文せらるべし

●感慨一律寄幸徳西川兩兄

横濱　藤軒　誠

蓋世氣兮拔山力　當時何事博任名
百代盛衰夢轉幻　一代榮枯塵與盈
明月無心空照座　胸衷有意獨低鳴
丈夫孤憤向誰說　半夜寒光鳳台情

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎露國革命の祖母

秋水 記

(一) 本年六十一歳の老嫗

▲何日か、或る諸君と語つて、偶ま露國革命黨の首領ブレシコフスカヤ女史の事に及んだ、予は座中の一婦人を顧みて「ブライではありませんか、日本の婦人なぞは到底同じ事はできませんね」と言ふと、婦人は「左うですよ、日本には男子でもソンな方はありますまい」と答へた、[illegible]婦人は投置き、所謂堂々たる日本男児でも、ブレシコウスカヤ夫人の事業を見ては、幾人か能く愧死せしめられぬであらうか

▲エカテリナ・ブレシコウスカヤ夫人は、露國南部の名家の生れで、本年取つて六十一歳、若い時から革命運動に[illegible]、其六十一年の生涯中、二十二年間は獄裡、苦役、流竄にて暮したといふ老嫗である、唯だ見よ、然し、如何に其大奮闘なるか、分るであらうではないか、彼女は一八七八年西比利亜から[illegible]、[illegible]年間再び革命の鼓吹に力めたが、政府の追跡は厳重なりし、露國全土に身の措き所なきなり、遂に[illegible]今は轉じて米國に来り、遥かに本國の運動を援助して居る、本紙前號(ニコラス氏書簡參照)露國の農民及び工等は、彼を敬愛して、呼んで『革命の祖母』と呼んで居る

▲彼は實に革命の權化である、彼の閲歴は、偶ま活ける露國革命史である、但だ其詳細を發表すれば、本國に在る多数同志の身上に大なる災厄の及ぶ恐れがあるので、[illegible]予は只未来の露國同志[illegible]大に記した所に依て、茲に其[illegible]

(二) 人民の中に行け

▲今より四十餘年前、一八六一年の亞歴山二世の農奴解放の一事は、其名こそ農民に自由を與へたが、[illegible]政府と貴族との[illegible]詐欺であつたのである、農民は政府に奴隷として、貧窮は却て大に増加した、自由は却つて甚しく制裁され、[illegible]報告に依れば解放以来[illegible]、一千一百回の[illegible]を見ても、其當時の状が察せられる、而して其の時は盡く兵力を以て鎮壓された、自由を與へ玉ふた皇帝に對し奉り忠順なる農奴等は悉く虐殺された、當時十五歳のブレシコウスカヤ夫人は、現に此等の慘状を目撃して、多感なる少女は幾度か政府の暴虐に[illegible]、幾度か農民の悲慘に其紅涙を濺いだであらう

▲續て革命運動の萌芽は、露國青年男女の脳中に、鬱然として芽ぐんで来た、併し最初の[illegible]は、一種の教育の運動であつた、[illegible]多数人民を教育せしめよ、而して自身も人民の中に[illegible]行けよといふ[illegible]、當時の若き男女は[illegible]行つた、彼等は[illegible]、革命思想を傳道し、其覺醒を促す[illegible]

▲此結果として、一八七〇年代の初めから、露國青年男女は、ドシ／＼瑞西に出掛けて行て、革命思想の傳道に必要なる社會經濟等の學問を研究するのが流行となつた、殊に亡命して居る彼等の先輩クロポトキン、ラウロフ、トカチエフ、諸氏の講演や、其外諸國の革命家との交際は、大に彼等を教育して、他日運動の才能的武器を得せしめた、斯くと知つたる露國政府の恐愕は甚しく、遂に一八七三年の『瑞西在留の露國男女に告ぐ』といふ有名な詔勅が發せらるゝに至つた

▲此詔勅の趣意は、露國の臣民は革命の勉強なぞは止めて、速かに歸國せよ、若し一定の期限内に歸朝しないものは永く其地位財産を剝奪するぞと[illegible]したのであつた、所が露國の青年男女は、そんな詔勅は屁とも思はなかつた、彼等は十分に革命運動の智識の準備が出来るまでは歸朝を肯んぜなかつたのである

▲是等の青年男女は、[illegible]社會の實相を研究した結果、現に多數の人民が貧困無智の憐れなる境界に沈淪して居る今日に、[illegible]食ふのは大なる罪惡と考へた、彼等は其父祖より自身に持つる富と教育とは、多數人民の所有であると確信した、人民の中に行け、彼等に手より不法に掠奪したるものを彼等に返せ、[illegible]時代に反響して、新智識を抱いて歸國した青年男女は、其家庭、其朋友、其快樂、其好む職を擲ちて蟬蛻の如く、皆な人民の中に赴いた、或は[illegible]となり、或は職工の徒弟となり、或は行商人となり、或は小學教師となつて、露國全土に散亂し、各村落を巡遊した、當時彼等の受けたる無限の苦痛と、非常の困難とは、到底吾人の想像だも及ばざる所である

▲當時富める青年男女が、如何に[illegible]ではないか、何ぞ高尚なる事業ではないか、そして如何に[illegible]ではないか、是れ實に[illegible]である、[illegible]切な[illegible]、嘲罵を[illegible]革命[illegible]に進入する状を歎へる[illegible]入口[illegible]散文詩の傑作を出さしめたのは、實に當時の露國[illegible]ウァーキー氏をして、西比利の配所に於て、其同志の縺くの世人に棄てられ忘れらるゝ一少女が、貧と寒さと寂しさとに死なんとする、革命黨少女の[illegible]とする小論を出さしめたのも、實に當時の露國婦人が與へたインスピレーシヨンであつた、今日露國の天に漲る革命の大運動は實に過去三十年間此の如き犠牲の道なりと云ふ結果であることを知らねばならぬ

(三) 西比利亜女囚の十餘年

▲此大運動は、時の内相パレン伯の報告に依ると、既に三十七州の廣きに跨つて居た、そしてエカテリナ・ブレシコウスカヤ夫人の如きは、婦人運動者の最も有力なる一人であつた、彼女はキーフ市に、コムミユンと名くる革命本部を置き、一大傳道軍を組織して、自分も常に農民の衣服を着て、各地を巡廻遊説した、日夜政府の探偵に付纏はれ[illegible]

▲併し此時分には、彼等は平和な傳道のみで、決して兇暴の手段に出る者ではなかつた、此平和なる傳道を變じて、兇暴の手段に出でしめたのは、實に政府の無法なる干渉の結果であつた、一八七四年、政府は革命思想を撲滅せんが爲めに、一時に一千人以上の男女を捕縛した、ブレシコウスカヤ夫人も亦同時に捕らへられた、彼女は農民の間に「ヘラ・ナサナ」といふ[illegible]名を附けられて居たから、暫時の間は夫人なることを知られなかつたといふことだ、彼女時に三十歳であつた

▲何しろ一千人以上といふのだから、露國歴史あつて以来の大獄であつた、四年の間も未決の儘で繋獄され、千人の中で僅に百九十三人の審問が有つたのみである

▲ブレシコウスカヤ夫人は、斷然審問を拒絶した、大膽なる彼女は法廷で叫んで曰た『汝は人民の敵である、汝は我等の敵である、我等は却つて汝に宣告を與ふべき罪状を準備して居るのである、汝は我等を裁判するの權利はないのである、汝は汝の良心を責て居るものではないか』斯くて彼女は六年の懲役を宣告せられた、彼女が西比利へ到着した時には、未だ特別に婦人の牢獄は出来て居なかつた、彼女は西比利女囚の先登第一であつた

▲此大獄の結果は、幸か不幸か、有名なるナロドナヤ・ウオルヤ(民意黨)は組織せられて、斷然兇暴の手段を取るに至つた、人民に自由を與へ玉ふたと稱する亞歷山二世陛下も一八八一年、爆烈彈に斃れ玉ふた、[illegible]の露と消え失せたのである

▲春の花、秋の紅葉、ブレシコウスカヤ夫人の辛い苦しい懲役の期限も遂に充ちて、夫れからは配所の生活に入つた(西比利では、懲役は滿期になつても、出獄だけで、或時期の間は本國へ歸ることは許されない、追放人として同地に居住せねばならぬ)活潑なる[illegible]たる彼女は、到底單調なる配所の生活に辛抱出來ない、出獄して程なく、數人の男子と共謀して逃走を企てた

▲然るに彼等は途を失ふて、數週間北部西比利の曠野を漂泊ふた末、遂に捕吏に見つかつた、其罪に依て彼女は又々四年の懲役を附加せられ、其上四十の笞杖を宣告せられたが、彼女は烈しく抗議した爲め、笞杖だけは免れた、其後ち第二回の懲役期限も漸く過ぎて、又々配所の生活を始めた、此年恰も米國のジヨージ・ケンナン氏は西比利漫遊中セレンヤンスクといふ村で、夫人を訪問したさうだ

▲ケンナン氏は西比利の事情、殊に露國革命黨の事情に精通して居るので有名な人で、去年我國にも來遊し、滿州丸の戰地視察の一行にも加はつたから、近頃日本にも知つて居る人が多くなつた、氏は其旅行中に大に彼女を賞讃し、此邊の百哩四方の間にアレ位な教育ある、婦人に出會ふことは出來なかつたと書てある、但しケンナン氏も、彼女が到底活きて還ることを得やうとは思はなかつた、而も彼女は、有ゆる辛痛を堪忍び、有ゆる艱苦に打勝つて、今や再び其老驅を提げて、露國革命運動の陣頭に立つて居るのである

▲一八九三年、夫人は其配所を去ることを、許された、但し一八九六年まで三年間は、西比利を出ることはならぬのである、彼女は語つた『予は此三年間を利用して、イルクツク、トムスク、クラスノヤルスク等の西比利の眠れる諸都府を擾醒した、露國本土に歸る途中でも到る處多少の生命を與へた積りである』眞に力めたりといふべしではない歟

(四) 『革命社會黨』の創立

▲一八九六年、ブレシコウスカヤ夫人は再び露國に現はれた、二十年間の幽囚は、少しも彼女の氣力を沮喪して居なかつた、彼女は歸來其使命たる職と信ずる所の爲めに寸時も手を空しくして居なかつた、彼女は政府から其放逐以外に出づることを禁ぜられて居るに拘らず、竊かに姓名服装を變じて、重要なる各地を巡遊し、盟を次ぎ、新交を訂した、靴下の青年男女は、此革命の祖母(バブシカ)を歡迎し、彼女を圍んで、熱心に其意見を傾聽した

▲扨て彼女が歸來した當時の、露國の形勢如何にと見れば、二十年間の思想界の進歩は實に驚くべきで、政治上社會上の諸問題に關する文書は到處に傳播し、社會主義の出版物は、公然若くは秘密に流行を極めて居た、併し實際の革命運動に至つては、却つて殆ど消滅の姿であつた

▲昔しの『民意黨』は、極端なる政府の迫害の爲めに殆ど殺つた、其有力者の多くは、或は牢獄に、或は配所に、或は殺され、或は自殺し、或は老い或は病死した、そして社會主義の運動は、一時政治的方面を去つて、經濟的範圍に限らるゝに至つた、即ち『勞働者解放同盟』てふ一派の綱領が、各團體の採用する所となり、是等の團體が更に『社會民主黨』を組織するに至つて、政治的運動は又々幼稚に開始せられたのである

▲併し社會民主黨の運動も、初めは專ら工業地の職工を糾合するに止まつて、農民に對する傳道は全く閑却に附して居た、彼等の運動は、殊に其『社會民主勞働派』の一派の下に組織を完全にして以來の運動は、多くを爲したには違ないが、彼等は工業的資本家制度の發達した勢のみを見て、露國全體の[illegible]、偉大の功果あることを忘れて居た、否な、農民は偏に革命を創るに足らぬと信じたらしい、斯くて彼等が其人民の大多數たる農民を度外視したのは、勢力を得る能はざる所以で、明らかに一の失策であつた、そして彼等は此時全然武力手段をも排斥して居た

▲ブレシコウスカヤ夫人は、稍や其方針を異にせざるを得なかつた、彼女は社會民主黨が工業地の勞働者を糾合するには贊成であるが、之と同時に矢張り七〇年代より八〇年代への[illegible]の希望と意見とを固執して居た、露國の革命は大多數人民、即ち工業勞働者のみならず、農民の多數が革命黨に與みするに至らなければダメだと信じて居た、そして、從來各地方に於ける無數の一揆叛亂の事實より推すし、露國農民は十分革命を起し得る能力が有して居ると信じて居た、彼女は即ち其生殘りたる諸派の同志と、新進の青年男女を左右に提げ、更に新たなる勇氣を以て、一層過激なる農民煽動の運動を開始した

▲此運動の開始と共に、政府の迫害が襲來するのは彼等の覺悟する所であつた、果然、機に農民の一揆、同盟罷工、示威運動は處々に暴力を以て鎮壓せられた、社會主義者の捕縛は頻々相踵ぎ、男女の囚人は容赦なく誅戮せられ、[illegible]された、そして有名なる猶太人の大虐殺、[illegible]、波蘭人の暴壓[illegible]は現せられた

▲於是乎暴を以て暴に代へんとする時勢は、露國全土を震動した、八〇年代の武力手段は又々採用せらるゝに決した、そして『社會民主黨』の穩和なるに滿足しないで、『革命社會黨』は處々に組織せられた、多數の青年は蠢然として之に赴き、世界の耳目を聳した、カルコフ、ポルタワ其他の諸州に、叛亂續出すると同時に、『革命社會黨』中の有志は別に『戰鬪團』なる一派を組織して、暗殺を一手に引受け、各地に於ける暗殺、農民人等の爲めに復仇した

▲新しき『革命社會黨』は、其創立日淺きにも拘らず、今や其勢力は[illegible]を以て蔓延して居る、黨中の[illegible]組織せる『人權防護會』は、熱心に全國農民の間に傳道し、新聞、雜誌、小冊子、檄文は秘密の手段を以て、全國各地に撒布せられて居る、而して是等の文學中、其多くは實にエカテリナ・ブレシコウスカヤ夫人の形容に成つたものである、彼女の運動は[illegible]のみならず、黨勢の擴張、黨務の整理の爲めに奔命を極めて、殆ど席の暖まるの暇なく、全國を巡回して到る處を我家として居る、此程米國の同志に語つて曰く『私はスッカリ露國の地理を知て仕舞ました、[illegible]から學んだのでなく、主義の旅行の爲めにです』

(五) 『革命の祖母』萬歳

▲一千九百年、露國警察は本部に、[illegible]して、ブレシコウスカヤ夫人の逮捕を命じた、[illegible]彼女は依然變名を用ゐ、或は農民の姿をし、或は[illegible]、或は尼の服を裝ひ、種々の姿を代へて其遊行を續けて居た、而も遂には身の措き所がなくなつて、[illegible]十年間の不撓不屈なる運動の後ち、彼女は故國を亡命するの已むなきに至つた

▲去年八月、アムステルダムに開いた萬國社會黨大會に、彼女は『露國革命社會黨』の一代表者として出席し、其黨派を世界の同志に紹介した、今や彼女は米國に来て、盛んに各都市に演説し、其米の露國人及び米國人に向つて、露國革命運動の爲めに同情を求めて居る、其結果、既に數千弗の運動資金が寄附せられた、彼女は之を携へて、再び露國に歸らうと計畫して居るさうだ

▲予は[illegible]して茲に至つて、慚愧と感奮と交々胸中に湧き返つて、何の語を以て謳ふべきかを知らぬ、嗚呼此き『祖母』を有する露國の社會主義の前途は實に多望なる哉、遙かに彼女の健康を祈つて呼ぶ、『露國革命の祖母』萬歳！

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●誰か村の改革者たるぞ

小田野聲

日本は未だ工業國に非ず、猶は古の如く農を以て立つの國なり、從つて日本社會主義の發達と成功とは實に農民の覺醒と運動に待たざる可らず、假令都會に於て理想ある青年と工場勞働者の活動あるも、地方農民の此れに從ふにあらずんば、其活動を熱心に助け、又自らも動くことなくんば、日本に於て社會主義が大勢力を有するに至ること難きや必せり、然らば農民は如何にして之を覺醒すべきか、予は[illegible]一商中、即ち此れに就て教訓を得たれば今少しく之を語らん

近日、自由と獨立の森林中より生れ出たり、自由獨立の精神は常に田舎の中にあり、貴族の勢力の最も跋扈する都會の生活は、常に市を見て天と自然とを見ざる不理想の人間、如何でか神聖なる自由獨立の大義を解し得んや、然り社會主義者は唯清新なる天然の中に生活する田舎の人の中にのみありて擾々たる市井の中に在るなる生活を爲す都人士中にあることなきなり、而も不羈獨立自由の性格を有する日本多數の農民が現在地主に壓倒されて甘んで居るは何ぞや、此れ彼等が未だ自己の權利を自覺せざるが爲なり、彼等にして一度社會主義の光明に觸れて自己の得べき正當の權利を自覺するに至らば、彼等の性格が自由獨立不羈なるだけ、社會改革の大運動は焰々として燃え上り、忽ちにして全國を風靡するに至らん、然らば彼等に社會主義の光明を與ふるは抑も誰の任ぞ、予は此れを以て村の智識ある青年農夫及び理想ある青年僧侶の任務なりと信ず、

從來村と云へば吾人は直ちに平和、正直、勤勉なる農夫の生活する、美しき境地といふ想ひ出すなりしに、資本の制度の發達して、小作人增加し、大地主が土地を兼併するや、平和なる村民の幸福は破壞されて、彼等の生活は益々苦しくなり、敦厚正直なりし彼等の性格は不人情不正直となり、都會に於ける工業勞働者の如く、彼等は墮落しつゝあるに至れり、而して彼等の多くは亦彼等の村を改革する能力なきに至れり、豈に悲み憂ひざるべけんや、

然らば予は何故に教育ある青年農夫と理想ある青年僧侶とが村の改革者たるべき者と云ふか、其は此二種の青年こそ此れが最適者たるを思へばなり、

試に、村內に生活する人々を分類し見ば、其は普通左の如き者なるべし、

(一)地主及び其子弟▲▲▲▲▲ 村の地主は多く頑癖不遜にして、其子弟は都會に遊學して官吏又は會社員となりて都[illegible]多く、[illegible]ある者も概ね頭に[illegible]主義自由主義を[illegible]する者なし

(二)役員、學校教師、醫師▲▲▲▲▲ 此等の人は村に於て最も開化せる種類の人なるも、役員は[illegible]の中には[illegible]少なく、教員は其役目に[illegible]社會主義を[illegible]理解し得るも其境遇[illegible]不自由なる[illegible]起[illegible]能はず、醫師には理想ある者少なく、[illegible]は金儲けにのみ没頭す

(三)商賈▲▲ 村の商賈は今の所も、老年中年の仕[illegible]に支配され、而して彼等は概ね[illegible]を指導する大任を[illegible]る者なることを忘れて財産を蓄積することにのみ[illegible]、[illegible]思想なく見識なき[illegible]者多し、其の[illegible]青年[illegible]社會主義的思想に感化を受けて歸り來る者[illegible]、村民も僧侶[illegible]の[illegible]を[illegible]信ずるを以て、寺院の[illegible]なる僧侶にして社會主義の思想を[illegible]するは易きことなり、此に予は理想ある青年僧侶を以て村の改革者たるべき者と爲す所以なり

(四)中學校及其子弟▲▲▲▲▲ 村の進歩なる分子は此種の階級中に存す、されど中には老年者、壯年者[illegible]思想[illegible]中にして中々に新思想新主義を容れず、而して其子弟[illegible]して[illegible]小學校位を卒業し[illegible]農業に從事せる者は社會主義的思想を最も容れ易く、[illegible]は彼等の宗教の如くなり、彼等をして新しき主義の爲に最も熱烈に運動するに至らしむるなり、予は[illegible]智識ある青年農夫と即ち此等の青年を指すなり

(五)小作人、小農及び其子弟▲▲▲▲▲▲ 此の村に於て最下層の地位にある者にして、地主に對して[illegible]なる不平を有して、村[illegible]社會主義を[illegible]最も[illegible]、[illegible]道[illegible]人が其に恰も枯野に火を點ずる如[illegible]、忽ちにして傳播して社會主義に[illegible]至る者なるも、[illegible]に[illegible]人[illegible]を[illegible]るに至る者なるも、彼等には智識なく[illegible]改革[illegible]指導する[illegible]能力もなければ、彼等は[illegible]べく[illegible]ふべし

予が所謂村の改革とは單に村民の風紀を改良し、地主の横暴と跋扈を防止し、自治體の進歩發達に努めよとの謂に非ずして、實に全村民を社會主義てふ大正義大人道、大熱火を以て洗禮し、彼等を悉く社會主義者となし、以て一方には村有財産を增加して殖産的新企業を起し、村民の富を增殖して彼等の生活を安樂にし教育機關を擴張し、其智識道德幸福とを徐々上進せしむべきと共に他方には全日本延いては全世界に於ける社會主義的運動の發達を輔助せよと云ふなり、斯くして始めて眞に村を改革せる者と云ふべく而して之を遂ぐるは決して難事に非ずして、予が右に謂ふ所の青年農夫及び青年僧侶諸君の熱心なる活動あらば其の成功するや疑ひなきなり、而して此等青年の村の改革者を作るの任を有する者は誰ぞ、曰く此れ全國各地に散在する同主義者諸君及び先覺諸君の責任なり、嗚呼日本社會主義將來の運命は繫げて諸君の双肩にあり、諸君よ、希くは最も熱誠に切に此二種の青年に向つて社會主義を傳道せよ、而して熱烈なる社會主義の青年農夫及び青年僧侶を作るに努めよ、此れ最も速に日本全國に社會主義的思潮と勢力を蔓延扶植する方法なればなり

●函根宮の下より

泣虫みつ

▲二月一日●●●● 此の頃少しく損じたる健康の保養旁々、少し[illegible]と思ふて、此の日午前十時の汽車で函根を志して新橋を出發した、湯本に着いたのが[illegible]時四十分[illegible]、それから[illegible]宮の下までの[illegible]、[illegible]人くなる、[illegible]旅館に[illegible]、我に獨[illegible]、[illegible]冬なればこそ[illegible]、僕の[illegible]下段の[illegible]あるへ此の秋人[illegible]色々なことが考へ出さ[illegible]、色々なことが思はれて[illegible]ない

▲二日●● 今朝七時に起きて窓を排すると、滿山白皚々[illegible]、靜かな天地[illegible]した樣な氣がする、朝飯後散歩に出て函根[illegible]、[illegible]た、[illegible]思ひ出[illegible]、[illegible]此の地[illegible]快[illegible]、△此の地[illegible]の[illegible]ろ[illegible]、[illegible]其の[illegible]は此の[illegible]湯[illegible]來た[illegible]、富七[illegible]に[illegible]し、[illegible]今は其の様な外來の人に取られて零落して居るとのことである、又此の家の主母は早く主人を失ひ、同じく早く妻を失へる弟と共に此の一家を維持せりとのことだ、不幸なものは緣よりて不幸な家に泊るもの哉と我れながら可笑しく、夕方窗により寄窓により物を思ふ、向ふの方から[illegible]コウも思ふに定め難れ、泣きつゝ今日も暮れにける哉、△深夜眼醒めると、洋燈が行燈に代へてあり[illegible]ながら行燈を見て、母に[illegible]して貰ふた當時のことを想起した、ボンヤリと、光る行燈眺めつゝ、我母思ふ、山中の宿」

▲三日●● 今日は天氣、八時に起き、床やに行き散歩して十一時に歸った、散歩しながら山を見て、此の山々は昔北條氏も見た山である、豐臣氏も見た山であろう、[illegible]はた赤穗義士も緣のある山である、人は一時にして去るも、山は[illegible]思ふて[illegible]した、山に[illegible]、「山を見つ思ふ故人の一生の、さても短き」△午後[illegible]二時頃より雪が降り出した、午後四時頃[illegible]を聞く窓を排して見ると、向ふの木の下に洋服の紳士立てり「寒さ」て、小枝に[illegible]小鳥を、下より狙ふ洋服の△人△彼に[illegible]、今日も亦空しく暮れんとするかな、[illegible]苦悶解かんと、[illegible]郡を出でしが、[illegible]△夕方宮山[illegible]兒が來た、[illegible]純な[illegible]て一夜シンミリと物語った

▲四日●●● 思ひ見て後、此の家の下を流れて居る谷川の方へ遊びに行った、スルと小さな橋があって夢想橋と書いてあった、ナル程夢想兵衛の渡りさうな橋だと思ひながら渡った、△此の橋上から見ると、[illegible]の上、此所の[illegible]の下にポツ/\小さな家があって、行つて見ると、函根細工の工場で[illegible]職工を拵へて居るを見ながらフト[illegible]時計[illegible]工のことを想起し、職工山中の[illegible]働く[illegible]を思ひ出すのは何時だろう[illegible]思ふた△[illegible]き、飯が食へる樣になった菓子も食へる樣になった△午後郵便より手紙が來た、嬉しく讀んだ、僕の手紙に誤り[illegible]、[illegible]さんが別々な判斷して[illegible]情ないことと思ふ、可笑しな氣がした、△明日天氣になったら、早く起きて芦の湖を見に行きたい、夫から宮ノ下で休養して、七日には下山歸京したい考へであるが、是非芦の湖を見て歸りたいから、天氣の都合で歸京は八日か九日になるかも知れぬ

●芦の湖畔の一日

みつ

▲昨六日●●● 午前七時に起き、宿の若主[illegible]に案內して貰ふて箱根町まで行き、芦の湖畔に一日の清遊を試みて歸った、△元箱根・[illegible]箱根に至るの途中、雲に達する[illegible]な杉の並木の間より見ると、湖水の向ふに眞白な富士が見へる、此の景實に絕美、△此の[illegible]を見ながら、余はフト昨年の夏[illegible]逍遙[illegible]田子の浦より富士を見たことを想起した、富士[illegible]だ、今、芦の湖畔に[illegible]富士を[illegible]見るの[illegible]心に[illegible]あり、[illegible]昔[illegible]少しく[illegible]なき[illegible]人の[illegible]夏、田子の浦より見る富士も、今見る富士も、變らぬものを[illegible]見たいものだ△新に箱根町に入らんとする所に、德川幕府が設けた關所の跡がある、石垣丈けが殘りて居る「人の自由を妨げし關所の跡に來て、見れば、石垣のみぞ殘りゐる[illegible]」武士も居らぬ、鎗も刀もない、今も尚人の自由を妨げんとしたる連中もある、其の人々を連れて來て、此の石垣を見せてやりたい△芦の湖[illegible]第二の目的は、湖に產する鱒魚を食はうと云ふにあった、[illegible]此の[illegible]らでない、湖水に網を入れさせたが[illegible]とのことで、殘念ながら食へなんだ、湖拔數千尺の高い所で[illegible]た臭い魚で晝飯などとは氣がきかぬ(六日午後四時)

●結婚とは何ぞや

白柳秀湖

△結婚は何の爲にするか

「戀愛は結婚に終る」余は之を、或る青春の詩人に聞けり、而も余は幾度か、世渡る[illegible]兄を批する道學先生の口より聞けり、[illegible]せよ、余輩は是者は、竟に戀愛の問題を口にするの權利なき者也

十九世紀末に於ける[illegible]現代の家庭[illegible]が「家門」「私有財產」の爲に男女の愛を[illegible]るより生ずる、冷酷なる人道[illegible]あり、今の世に於て、男子は何の故に妻を求むる乎、女をなさんが爲也、何の故に家をなすか、家門卽ち財產の相續者を失はざらんが爲也、

果然、女子は一種の子を生む機械として、男子によりて要求されつゝあるなり、假令今の結婚は、愛の爲にするか、家門の爲にするか、此問題の解決は、[illegible]結婚に終るべき乎、否乎を決すべき中心點也。もし家門の爲にする結婚なりせば、余は大膽に斷言せん、全く家畜同樣の結婚にして、此社會、戀愛は必ず[illegible]ならん。

大和家が其家門の爲に、愛情豐の如き夫婦を離緣せしめたるが如き、[illegible]なる極端の例は暫く云はずとするも、少くとも現代が、其家庭に於ける愛の權利に傾聞しつゝあるは、明白なる事實也、必ずしも、かのダンヌンチオ、トルストイ一派の[illegible]といふべきに非ず。道學者よ、汝が口を極めて、過激なる詩人を叱する前に少しく現代の家庭制度に向つて、批評を試むるの必要なき乎。

△社會學の家族論

余の讀みける社會學中の多くは、其家族論に於て、女子の絕對的解放を非認せり、然り、余も亦社會の情勢として之を認めたり、然るに一方に於て、女子に對する人道の觀念は、[illegible]此の問題に衝突して、解決[illegible]として、常に[illegible]女子職業問題に染めたる時の如き、常に此不備[illegible]の中に[illegible]て、姑くこれをゴマカシ置きたり、然るに[illegible]共產主義の理想を以て此問題に臨みたる余は、宿日の疑惑、忽然として氷解したるの感あり、愉快、[illegible]はざるものありき。

△眞の解釋

男子が女子と[illegible]の結婚をなすは、私有財產制度の爲也、男子が經濟上の手段を[illegible]して、女子が依賴となすの實際[illegible]は、何れの社會學者も之を社會の單位といふのみ、其單位の批評に[illegible]、[illegible]家族制度は[illegible]する以上、婦人問題は依然として、解きされざる也、果然余の矛盾は之より生じたるなりき。

此の如くにして、[illegible]川兄の[illegible]をきくに、余の疑惑は已に久しき[illegible]以前より此解釋の鍵を提られたる也、而も余の[illegible]なる、今にして初めて之に氣付きたり、慚愧何ぞ堪へん。

共產的大社會組織されて、私有財產と子孫の爲に維ふる家族組織消滅せば、其時男女の愛は永遠にして、戀は結婚に終らざるべし、否結婚は不必要也、プラトーンの理想は架空の夢のみならんや、之を外にして自由の戀愛論も、婦人問題も、將來の未なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●社會主義日曜學校

（ボストンにて）　金子喜一

社會主義日曜學校とは、その名の示す如く、小兒や青年を集めて社會主義の教育を受け聞かすのである、ボストン市街の端で電車を降りて、二十歩も行きかへすと、大きなハンチングトン館と日ふ建物がある、社會主義日曜學校は此館の四階の一室を又借して、日曜日毎に集ることにしてゐるのである、

予が戸を排して入つた時は、既に集會は開かれやうとしてゐる時で、年若い婦人が四人、男が四人、十二三歳の小供から成合つて十二人ばかりゐた、予は唯た主任者らしき人に參觀に來た由を告げて見てゐると、先生は先づチカゴ市のムア氏の出版に係る社會主義唱歌集を予に一部與へた後、開會の序として、會衆に與へる合唱を命じた、ピヤノの音と共に可愛らしき女男交じりの聲はあがつた、歌の意は、[illegible]と日ふので、教會で聞く讃美歌の如きものとは少しく異つて、皆な人間の歌である、ヒユマニテーの聲である、[illegible]勞者に[illegible]の曲に我が及んだ時、予の心は甚だしく動かされた、嗚呼此れら無邪氣の少年男女は、此の微妙なる音樂の間に早くも人道の聲を聞きはじむるのである、此等の中より幾多のリープクネヒト、プルードン、シモンが出て來るであらうと思へば、余は實に感謝に耐へない、

[illegible]を終ると先生は話をはじめた、それは談話と日ふことに付て分り易く話をせられた、大意を日はふなら、談話と日ふことは自分の思ふことを日ひあらはすので人間の進歩にこれほど貴い者はない、と日ふとから、終には私どもが自分の思ふことを悉く日ひ現はし得るやと尋ね、あるひは諸國の例をあげ、あるひは社會主義の研究者の生涯をつたへ來りて、如何に多くの人民が自分の思ふことを言ひ現はさうとして苦み、又は殉死したかをのべ、轉じて人間の自由が事實の上に說きおかした、それから生徒の話があり、談話ありて、又唱歌を以て終りを告げた、

予は終始生徒の心理的活動に注視してゐたが、不思議にも、多くの日曜學校に見る如く形式的の弊がなくて、彼等の神經は自ら動いてゐるらしいのであつた、一人の女の先生が、同情とは何ですか―と質問したら、多くの生徒は一樣に手をあげて答へ得る由を示すと、先生はその中の一人に指命した、すると生徒は起立して、同情とは他人を氣附けると日ふことですと答へた、何故私共は他人を氣附けるのですかと再問されて、それは私どもより困難してゐるからですと生徒は返へした、予は是等の談話の間に生徒の心理を見ることが出來たのである、

◎集會が終るや、余は露國の婦人カニコウ夫人に紹介された、余は夫人に日ふた「私ども同胞は眞に御互に斯く殺し合ふてゐるのに、私と君とはかうして握手してゐるのですね、人間と日ふ者は思想次第で敵ともなり味方ともなるかと思へば誠に不思議な者ですね」カニコウ夫人は醫師カニコウ氏の細君で、氏の家はボストン婦人社會主義者の集會所となつてゐる位で、非常な熱心家である、

◎日曜學校の校長は電氣技師で、自身の語らるゝ所に依れば、氏の社會主義は全く唯物論の根底より出で、今の宗教や精神的人生觀を無視してゐるとのことだ、氏は彼なる一人を指して、彼の人は私と違つて全く精神宗教に深き興味を以てゐらるゝが、矢張同主義者です、何と妙な交際ではありませぬか…と、なほ氏は語をつぎて、此學校は婦人社會主義俱樂部の附屬で、更に寄附金に依りて維持してゐる由を話された、予等が室を出た時、雪は益々重く降りつゝあつた（十一月廿八日）

●東西南北より

△花びらは蝕られても矢の中の百合の花は高き匂を放ちます、どうぞ其本分を盡させて下さい、平和の君よ（救世軍横須賀小隊内、虫骨生）

△大阪の店の[illegible]不都合にも店頭に出しありし戰時發行の物を先日來取片付あり、理由を問へば[illegible]の世の中、戰爭を讃美せるを中傷[illegible]（[illegible]生）

△[illegible]は不相變の讀書生、社會主義に就てはワグチル、シユモール等の諸教授の講義を聞いて居る、所謂講壇社會主義といふのであらう、君と君の反する主義を科學的に研究したまへ、寧ろ歴史の書生としてゞもしたいと思ふて居る（伯林、齋藤清）（堺生へ）

△予は基督教信者なり、然り社會主義を[illegible]する者に非ず、基督の精神を行ひて自然社會主義の純なるものを顯現せんとするものなり、故に所謂社會主義者の活動に歩調を合す能はずと雖も、常に其意氣に感じ、願はくば神の聖意に立ちて無慾の[illegible]を[illegible]らんとな所るものなり、予は一月二日より書籍店を開始し一小店頭に陣取して働きつゝあるもの（陸中花巻、[illegible]、齋藤宗次郎）

△（前略）一個なりとて笑ひたまふな、是に予に取りては、到る牛乳、牛肉とを配達し[illegible]、血と汗との化身なるを。[illegible]當地の讀者には中々面白き異樣の人物を含み居候、學生、軍人、[illegible]、[illegible]、傳道師株に面白き[illegible]部[illegible]氏、[illegible]當地には[illegible]人の[illegible]族にして、其人の生存中は婦人會の[illegible]など、眞人の[illegible]以後、誰も來てくれる人に無い、今でこそ少しの[illegible]、[illegible]の後は[illegible]うとて泣くしほに居る若き婦人も有之候（[illegible]）

△[illegible]然らば火柱となれ雲となれ、凝りては天津[illegible]自由化と[illegible]火柱を負ふて抱きて我に叫ばん、こゝぞあらはれ、やがて[illegible]の國（[illegible]）

△平民新聞の如くにして生き、此の如くにして死せ、孔に悟なし、我等は[illegible]、[illegible]な戰ふて[illegible]る夢の首をたるを見るべし（四壁[illegible]同志、飯[illegible]）

△私は近々○○市に轉勤して[illegible]、本校を去[illegible]、遂には今一名の女教員を社會主義に引入るべき考、余の部下にも小さき社會主義者十名[illegible]同志の[illegible]の部下にも約五十名[illegible]（[illegible]教員）

△政府は谷中村を買收して瀦水池となす計劃なりと云ふ全村反別一千六百町の土地[illegible]、[illegible]一見例の[illegible]度候、此全村の堤防修築費二十萬圓を前後にし足りり、然るにこを谷村に與ふるに、却つて四十余萬圓を支出せんとす、怪しむ可き次第に候、[illegible]、古河礦業[illegible]より十五町（群馬縣谷中村外四個村民より）

△熱火と鮮血とを以て戰を宣したる赤紙に對しては小さき吾等にも亦多大の感慨なき能はず、事既に茲に至る、吾等は唯將來の大[illegible]を期するが爲に結く現在の[illegible]の苦痛に甘んじて徐ろに露國亞[illegible]の同志と政府と[illegible]ある教訓を味はんと欲す、[illegible]行け二君、日本社會主義者の心は、常に又何處にも、兄等と共に在るを記せよ、而して小さき身は此方にも彼方にも起りつゝあるを記せよ（六十山莊の同志八名）

●兩君に寄する歌

戸谷蓮香

神の御旨と平和を、
地に叫ひし君二人、
罪に滿ちたる人の子に、
罪を問はれて牽かれしか。

炎の柱、雲の峰、
正しき道のしるべぞよ、
行け行け行きて響ある、
恥辱の門をくゞれかし。

見ずや小さき人の子が、
如何に踏めども蹂れども、
道邊の野菊しほらしく、
咲かでは止まぬ力あり。

疑いかめしき奴等を、
あて人とこそ人は云へ、
貧者の袂かはくまも、
わらぬ識を知る君は。

よしや囚屋の衣うすく、
夢成りがたき夜はあるも、
一人はゝゑむ胸の中、
さぞな血潮のたぎるらん。

防かば防げ、堰かば堰け、
流れ流れて末終に、
大海原に注ぐこそ、
水の使命と知らざるや。

●社會主義大演說會

△時　二月十三日午後六時より
△處　神田靑年會館に於て
△題及人　左の如し

○平民の眼に映じたる文明　山田金市郎
○國家の藝術と人民の幸福　西川光次郎
○御十開と平民　堺　利彦
○不滿の世の中　石川三四郎
○東京市の社會化　田添鐵二
○露國革命の由來　幸德傳次郎
○露國革命と皇帝の位地　木下尚江

●少女の私有財産

少[illegible]生

予が教育せる兒童の私有財産を調べし中に左の如き富豪（？）あり。十歲の[illegible]田舍の少女、何且此附近あるかと、予は[illegible]を禁じ得ざりき。

新小紋お召　十五圓　[illegible]
[illegible]長着　八圓　[illegible]
銘仙[illegible]長着　五圓　[illegible]
[illegible]名[illegible]　十五錢　[illegible]
メリンス帶　二圓　[illegible]
木綿着　五十五錢　[illegible]
双子着物　二圓　[illegible]
[illegible]兵兒帶　四十錢　[illegible]
足袋二枚　一圓二十錢　[illegible]
[illegible]二ツ　二十五錢　[illegible]
簪二本　二十三錢　[illegible]

△以上合計[illegible]百二圓[illegible]

百圓の金は正に彼の少女の師が一箇年の報酬に當る、此の子弟にして此の教師あり。何等の好[illegible]ぞや

●新刊　木下尚江君著小說
火の柱
[illegible]第六版出來

著者の熱情の熱、對するに由なく、[illegible]の文字に化せるもの、[illegible]（[illegible]）

良人の自白
再版出來

曰く有夫姦、曰く有婦姦、是れ勿論人生の最大罪惡也[illegible]（定價卅五錢）

發行所　東京市麹町區有樂町三丁目　平民社

●幸德・石川兩氏送別會

兩氏に對する筆禍事件は目下大審院に上告中であります。[illegible]今日の裁判の下に於ては入獄の[illegible]と思ひます、そして[illegible]兩氏の行を[illegible]と思ひます、有志の諸君の來會を願ひます

▲會場　平民社樓上
▲日時　二月十六日午後六時より
▲會費　金十錢

發起人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●通俗社會主義

△ブラッチフォード氏の『メリー、イングランド』（樂しき英國）は、英國のみにて八十五萬部も賣れたといふ名高い書であります。此書が社會主義の思想を英國に擴めた功績は、實に偉大なものと云はれて居ます。そこで私は[illegible]日本に[illegible]して、又或處は少しく改めたり致します。

（一）人生の問題　　堺枯川

社會主義と云へば、諸君は天でモウ道理に合はぬ無茶な議論だと思ひ、社會主義者と云へば、見るも恐ろしい惡黨か狂者かの様に思つてお居でなさるかも知れぬ。然しマアさう見限つたものぢやありません、我々の云ふ事だつて一應は聞いて見て戴きたい。

諸君は乾度、小面倒くさい理屈を云ふのはお嫌ひに相違ない。そこで私は成るべく理屈を避けて、現在目の前の事實を踏まへて、それで以て諸君の常識に訴へる積りです。

先づ諸君は貧乏するより裕福に暮す方がお好でせう。それから、出來る事なら他人をも、成べく樂にしてやりたいとお思ひでせう。然らば今茲に私が、總ての人に生活の苦勞、衣食の心配を免かれさせる法があると申すなら、諸君は人情として、一應は聞て見る氣におなりでせう。

私は勿論、其儘それを信ぜよとは云ひません。善く考へもせずに人の云ふ事を信ずるのは、そりや[illegible]愚かな事です。けれども、十分に説明を聞いて見て、若しやそれが尤もと思はれたら、其時は贊成して戴かねばなりませぬ。若し只新しい説だからとて厭がる人があるならば、それは實に不見識と云ふものです。汽車でも電信でも、三十年前までは新しかつたものです。電話などゝそんな馬鹿な事が出來るものかと、笑話にした時代もあつたのです。新しい説だからとて惡いとは極りませぬ。現にダーキンの進化論の如きも、一時は様々の批難攻撃を受けましたが、今日ではモウ何人も其眞理を疑ふ者はありませぬ。

そこで諸君、諸君は謂はゆる虚心平氣で以て、極めて公平に、極めて着實に、例へば裁判官が訴へを聞くが如く、私の云ふ事を聞いて戴きたい。そして諸君の獨立の判斷に依つて、私の説の可否を定めて戴きたい。

扨先づ問題は何ぞや。私は之を人生の問題と云ふ。茲に國と人民とあり、此國と人民とを最も善くするの法如何と云ふのです。

次に其國と人民との性質を云へば、國は土地肥て産物多く、人民の必要物は大抵皆備はつて居る。そして人民は怜悧で、勤勉で、强健で、忍耐力もあり、發明心もある。然らば其國の人民は皆衣食足り整うて、健康を保ち、幸福を得て居さうに思はれる。處が實際さうで無い、我國の人民の多數が、兎かく衣食に事缺きて、體も弱く、樂みも少く、此世を面白からず送つて居る事は、誰も認めて居るでせう。

サアそこで私は云ふのです。此人民が本當の仕組に依つて働くなら、何も其様に朝から晩まで眞黒にならずとも、此の國は必らず衣食足り整ふて人民皆安樂になるに相違ない。處が今日では人民の働き方の仕組が惡い。私は其の本當の仕組を諸君に説いて、其仕組でやる時にはドンナ結果が生じて來るかと云ふ事を、ザットお耳に入れたいと思ふ。

一體、今日の社會では、個人の努力即ち競爭と云ふ事を理想にして居る。それは即ち銘々自分の爲ばかり考へると云ふ事で、何人でも一生懸命、根かぎり働いて、出來るだけの金をもうけ、そしてそれを自分の樂みに使ひちらし、又それを子孫に遺すと云ふのです。是れは今の世の個人の理想ですが、今の世の國家の理想は又『世界の工塲』となる事です。即ち、外國に輸出すべき商品をドシ／＼と製造して、大金をもうけると云ふのです。

私の理想はそれとは違ひ、人は皆、其同胞兄弟と共に働いて、共に利益を得ねばならぬと云ふのです。外國と貿易する前に、先づ我國の爲を計らねばならぬと云ふのです。それで是より、此理想に基きたる『働き方の仕組』を申上て見ませう。

●女囚を憐れむ　　孤劍

光明を呪咀ふ魔の如き
さ青き衣に、鐵門を
若き女囚の歩みゆく
さびしき影を眺めずや

玉藻をかづく珊瑚か、
呼吸の管の破れしごと
愛の乳房をうしなひて
罪惡の園生にまよひしか

天父があたへし平等の
光も見るはかなはねど
夜半吹きすさぶ木枯を
厚き衾と感謝して

天には星よ、野には花
乙女の心胸に匂ふべき
淸き緒琴もいたましや
運命の斧にこぼたれぬ

さはれ獄裡を悲しみぞ
黑き「恐怖」の巨洋も
「悲歎」の岸にをくりたる
「誘惑」の帆もあらざれば

見よ金裝の經卷も
冷たきパンに若かずして
「饑餓」と「道德」との鐵鎖强ひ
盲目ならずや敎法師

罪惡なき者よ石もちて
彼女の白　額打てと
聖者の叫びかしこきに
あゝ秋風に淚流れぬ

●平民社より　　枯川生

△社中無事、西川君は去七日の夜函根から歸つて來た。神崎君の風邪も全快した。

△安部磯雄君は相變らずマルクスの資本論の反譯に從事して居ます。『こんな六かしい本を讀んだ事が無い』と或時シミ／＼話して居た。初は一頁二時間位で出來る積であつたが、實際やつて見ると、時としては一頁に五六時間も費す事があるとの事。何しろ社會主義のバイブルとも云ふべき者、我等は安部君の勞苦を感謝しながら、樂しんで二年の後を待たねばならぬ。安部君は又、六月七日の毎日新聞に『向上の一路を讀む』と云ふ論文を載せた。例の茅原華山氏が『社會問題解釋法』の批評をしたのに答へたもの。我々はアンナ不眞面目なものに對して答へるには及ばぬと思つたが、安部君はそれでもヤハリ諄々として答へて居る。

△片山潜君は米國テキサス地方に滯在して居る。少しく開墾を試みる積りとか。妻に死に別れて、二人の子を人に托して、遠く外國に勞働する君を想へば、眞に氣の毒の感に堪へぬ。

△森近運平君は、元岡山縣の官吏で、岡山いろは倶樂部創立者の一人であつたが、鷲尾教導（監獄教誨師）、對原長治（縣立病院醫士）の二氏と共に、社會主義の爲に其職を失ひ、（前號にも報じたる如く）今度大坂地方へ[illegible]平民文庫其他社會主義書類の賣捌をやる計劃を立て、目下本社に滯在して其打合せ中である。近々君が西下して大阪に至らば、先づ大阪平民社を起し、近畿地方に於ける運動の中心を作つて貰ひたいと思ふ。近畿同志諸君の御聲援を乞ふ。

△右に記した鷲尾教導君は、目下讃岐の郷里に歸つて、讀書冥想に耽つて居るよし。又右の對原君は先頃より加藤時次郎君の病院の醫員になつて居る。

△今日本の社會主義者には耶蘇教出の人が多いが、佛教の人も亦決して少くない。本社の[illegible]高島米峰君が日蓮宗の信者なる事は御存じの方も多いでせう。鷲尾教導君は眞宗。それから新佛教徒には杉村縱橫、毛利柴庵、和田不可得等の人々がある。先日は又、伊藤證信君が巢鴨の[illegible]から態々遊びに見えた。

△人亦弱水、岩本眞香、加藤龍彥、中川月桂、原霞外等の諸君は今度『社會劇會』と稱する一座を組織し、大いに社會問題を劇に上すの計劃ありと云ふ。社會主義的思想を多方面に廣むるの好方便であらうと思ふ。我々は切に其の健全なる發達を希ふ。

△『眞人の自白』の初版はモウ殆んど賣れてしまつた。二三日中に再版が出來る筈。木下君は此頃トルストイの『アンナ、カレニナ』や、ユーゴーの『ノートルダム』を讀んで居る。それが如何に『眞人の自白』の後篇に影響するかは見ものである。

△西川、幸德、二君の公判は來十六日大審院に於て開かれる筈。二君はいよ／＼今月末に行くのか知らん。共産黨宣言の控訴公判は十七日開廷の筈。

△去八日、金澤から延岡爲子氏といふが本社に來て與した。是れは松岡文子氏の先達ての廣告に依り、本社の勝手方を手傳はんが爲である。平民社は冬の底にも春風が吹いて居る。

●運動基金（寄附廣告）

▲金一圓	日本橋	無名氏
▲金十五錢	大坂	寺西清太郎氏
▲金一圓（第二回）	靜岡縣	平賀[illegible]三氏
▲金四十錢	秋田縣	加賀谷龜[illegible]氏
▲金三圓	熊本縣	吉田松[illegible]二氏
▲金五十錢	岐阜縣	伊藤[illegible]維氏
▲金二十錢	下谷區	荒井[illegible]亮氏
▲金一圓（一月分）	丸屋町	無名氏
▲金一圓（二月分）		同上
▲金十錢	高知縣	楠内登吉氏
▲金七十錢	廣島縣	三宅[illegible]氏・堀[illegible]氏
▲金一圓		木下[illegible]氏
▲金一圓	横濱市	竹生福太郎氏
▲金卅二錢五厘	大坂市	幽月女史
▲金十二錢		青[illegible]
▲金一圓	釧路	宮本[illegible]太郎氏
▲金一圓	近江	竹内治右衛門氏
▲金卅二錢	上野	松崎[illegible]氏
▲金五十錢	仁川	田中[illegible]四郎氏
▲金一圓	青山	無名女

小計　金十五圓四十二錢也（二月三日より二月九日まで）

△運動基金の收支計算は次號に詳記すべし
△運動基金は平民社内堺[illegible]に於て[illegible]

●平民文庫出版

●社會主義入門
●消費組合の話
●理想の國　瑞西
●社會民主黨設立者　ラサール
●土地國有論
●富の壓制
●マルクス
●經濟進化論
●小説　火の柱
●小説　良人の自白
●百年後の新社會
●理想鄉

發行所　東京市麹町區有樂町三丁目　平民社

同志の運動

●足尾銅山遊説　松崎源吉

▲一月廿日　午前五時の一番列車で上野を出發して、十一時日光に着いた、停車場に永岡氏が待って居たので、相談の上直ちに[illegible]に入り晝飯を取し、[illegible]草鞋に穿き換へ、[illegible]のなから、杖に助けて無事に旅館に投じた、間もなく勞働同志會員諸氏の來訪があって、種々會の近状を承はって夜を深した。

▲廿一日　昨年十一月永岡氏[illegible]割烹、金田館[illegible]午後七時から開會した、先づ山崎君登壇[illegible]坑夫の窮状を述べて、勞働者の位地に[illegible]勞働者自身に[illegible]社會主義[illegible]約一時間位[illegible]何人[illegible]依頼するに[illegible]なりと[illegible]述べ[illegible]散會したのは十時半頃[illegible]來會者三百五十名位であった。

▲廿二日　[illegible]引続き午後七時から金田座にて開會した、開會前から[illegible]人と人とが人壁に激しくな[illegible]二百人近く有った、山崎、竹田、永岡[illegible]予は社會主義と勞働者と[illegible]述べた、[illegible]昨晩より激しかった[illegible]散會十一時。

▲廿三日　當夜は雨と雪が混じって降って來たので[illegible]午後七時より本山の[illegible]いろは座[illegible]永岡、山崎、竹田諸氏の演説が終った後、予[illegible]二時間位述べた、聽衆は僅か二百人位であったけれども、實に熱心なので、[illegible]散會したのは十時半。昨年十一月出張した時[illegible]較ぶれば、非常に聽衆が少ないのは[illegible]、殆んど寝食を忘れて奔走した[illegible]警告したのに、何故だろう、[illegible]古[illegible]反對者が必死の妨害運動[illegible]。

▲廿四日　[illegible]樓上にて向後の運動方針[illegible]懇談會を開いた

▲廿五日　足尾中最も會員の多數を有する小瀧村[illegible]開會時刻七時には[illegible]來會者三百以上に達した、[illegible]人間を忘れた様になった、來會者の[illegible]永岡氏の演説あり、最後に予は勞働[illegible]約二時間[illegible]、ヒドイチーと謂[illegible]下野氏の[illegible]次回迄延[illegible]。

▲廿六、廿七日　二日間は與陽館の樓上にて四ヶ山の協議會を開き、日本全國の鑛山に向て運動すべく、將來の大計畫を議した、其結果強盛り東京の平民社を日本勞働同志會本部と定め、[illegible]の擔任者を置き、日本十五萬の坑夫をして一團となすべく、成る可く多數の遊説員を各鑛山に派遣する事、第一着として足尾の支部を一層整理擴張すべく、役員の撰擧等を爲して夜を深し、色々の希望に滿たされながら床に就いた

勞働同志會は目今僅かに千人位の會員を有する一小團體に過ぎないけれども、其の勢力は既に非常なるものである、其一例を擧ぐれば、會員の一人にして、澁谷久太郎と謂へる一坑夫が坑内就業中、落石の爲め左足を挫いた、若し此の坑夫が普通ならば、僅かに四週間位の[illegible]位に過ぎないのに、澁谷氏は同志會員であるから、粗畧な取扱をしては會の抗議が恐ろしいと謂ふので、之れを一等病棟にしたるのみならず、醫局長の見舞も[illegible]けたとの事(坑夫の質問に醫局長自身が見舞ふことは今回が初めてだそうだ)而して足尾の病院で尙は不足ならば、東京迄でも送って治療して與へると謂って居るさうだ。

坑夫生活の窮状は昨年十一月の足尾の[illegible]紀に西川君が委しく書いて置いたから、茲には彼等が將來の運命を覺醒しつゝある原因の二三例を擧げて見よう

▲銅の價格近來非常に騰貴して昨年末に比較すれば殆んど一割りも高くな[illegible]昨年度の如きは鑛山開鑿以來[illegible]なりし、[illegible]の利益を收めたる結果役員には平均五個月以上を賞給したるのみならず一萬餘圓の賞與を分配せられたるに、坑夫の給料は却て減却し、通洞方面の如きは、三百名位の坑夫に食料即ち南京米の支給を廢止められたので是等の坑夫は、日今南京米二三合に人數の干葉を炊き混ぜて、一家四五名の飯となし、漸く、虫の息の通ふ命を支へて居る

▲其れから坑夫の内負傷、疾病(勿論過勞の結果て)等の爲め勞働に堪へざる者は、遠慮なく放逐されるので、其數年々增加して近頃は毎月十人以上宛もある、此の放逐せられたる坑夫は、破草鞋を穿ち[illegible]を[illegible]妻子の手を曳き、[illegible]つた顔で路頭に迷ひ、日光峠を越えて、何處の空に[illegible]もなく消へて行くのである、此の事實を毎日幾回も見ながら如何に愚鈍な人間でも、安心して居らるゝ筈はない、今日は他人の身の上だが明日は自分の頭上に來るのだと思はざるを得ない、其れで足尾の勞働者の多數は何人も團結の必要を感ぜぬ者はない、吾人は此の銅山の團結が延て我國勞働運動界の覺醒を促す者なる事を疑はぬのである

▲廿八日　早朝より雨が降ったので、少し[illegible]した爲め、一番の馬車に乘り遅れ十時の馬車で出立した、日光峠に雲が立ち籠めて居るので、予は二度滑って倒れた、日光[illegible]て發した本田君も二度滑ったと[illegible]った、あの險阻の峠を雲の降る日に見送って下さった本田君の御厚情を深く謝し升、東京の私宅に着したのは午後十一時であった、

▲社會主義婦人講演

去る五日午後一時半より平民社樓上に開會、豫告の如く松岡文子、木下尚江、今井歌子諸氏の講話ありたり、木下氏の「貞操に對する迷信及疑問」は氏が得意の疑問に突き込む論法を以てし、面白きが中に痛烈の裏心に革命の熱血を注ぐが如き感ありき、今井氏は如何にも[illegible]なる頭腦を以て自己の經驗を語り、婦人の社會に立ちて先づ價値を要するは其言語動作云々にある旨を說き、松岡氏のは別頁所載の如くなれば略す、閉會せるは四[illegible]三十分頃

▲社會主義談話會

二月二日府下瑞穂村にて開會富村は東京に近しと[illegible]も野卑[illegible]を[illegible]て本所深川邊に出入するにも拘らず人々[illegible]を積むのみに熱心にて事間又は時事問題に注目するもの少き由なるが教員某氏の周旋にて有志十餘名[illegible]に臨める家に會し余は「社會主義及ひ[illegible]」に付て話し夜半まで社會主義に關する談話をなしたり(吉田璣)

▲早稲田社會學會例會

去る四日午後同大學構内[illegible]に開會來會者四百餘名空前の大會にて第一に白柳氏文明の批評第二安部先生一「[illegible]山君に答ふ」と云て細目に分ち精細に評論し國家社會主義社會改良主義を論じ、最後にマルクス資本論の要點を説明[illegible]、第三新紀氏社會主義發達論にて大氣焔を吐き[illegible]余と山田氏とは次回に讓りぬ、四百名の研究者以て早稲田に於ける社會主義の發運を見るに足るべし(吉田璣)

▲神戸平民倶樂部より

平民新聞の死した當日一月二十九日は私の誕生日に當りますので、私は神戸平民倶樂部員を招きまして有意味の會合をいたしました、熱心なる部員十人程集りたれど流石に猫も犬も知りませんでした、粗末な御馳走ではありますけれど、夜二時まで談り合ひました「直言」に[illegible]續いて戰ひます

▲救世軍橫須賀小隊より

今同志は三人あります、時々相會して語り合ふて居ます、今は平民社其他から教を受けて時の來るのを待つのです、何卒此三人相離り相學びつゝあることを覺えて居て下さい(魂會)

▲陸奧國下北郡より

當地は概して生計裕かなるより我黨の主義は容易に觀念を動かし難く候、然るに此度伊藤敬太郎氏と面談し大に意を強め候、伊藤氏は東奧の俊男兒にて百人の間に意を得候より今は可相成く喜び居候、不日同氏と共に實地の行動を試みながら傳道の覺悟に候(衛地叔三)

▲土佐平民倶樂部例會(第三回)

△時　來る二月十八日(土曜)午後六時より
△處　土佐郡下知村多賀神社前會員部方
△費　會員の外は要せず
△議題　常務任員部長選の件

今回は新聞記者牧師等招待の筈に付讀者諸君奮て來會せられよ

▲大阪讀者會例會

△時　二月十八日(第三土曜日)午後六時より
△處　西區江戸堀南詰東入る北側初の路次池上方
△費　會員の外は要せず

●天地と人間　（二月五日婦人講演草案）　松岡ふみ

△昔から人は一個の小天地とか小宇宙とか申します、申しますと、天地は無限無窮で、人間は僅か五尺か六尺ですが、その[illegible]い不思議なる、一分ばかりの短い頭腦で、數千年の昔の事なども[illegible]無限の天地を眺め[illegible]に至っては、天地の[illegible]と少しも違ひませぬ

△それで、天地自然が人の感想に及ぼす影響は又甚だしいもので、人の一生は恰も一年に四季のあるやうだと思はれます、慈愛深き母の懐に抱かれてゐる乳兒時代は、冬の夜寒に爐火が熱んでゐるやうで、若草や若芽の萌え出で、花さき滿ちる陽氣な春は、[illegible]盛りの少年時代で、爽かな[illegible]が如き夏の青年の頃で、人の初めて世に立ち、秋の波[illegible]吹かるゝ壯年の頃で、枯木刈入れの秋は、人の身の方針も定まる中年で、枯木蕭條として萬物動かざる冬の天地に人老いて仙骨となり天地に歸するのに能く似てゐるやうです。

△然るに、天地は規則正しく、靜然として、定められたるまゝに、年々歲々繰り返しますが、人間は中々豫想した樣にはなりませぬ、それには人は絶えず進歩してやまぬからでもありますが、一つは人間には小さい情のある爲計らずも一時の情で、豫て冷靜に考へておいた事を誤る事があるのでせう、殊に日本の女性には、一時的の弱い同情心が多くあるやうに思はれます、それで人は、大抵の事に出來るだけ、靜かに冷かに考へて、天地自然の規則通りするやうに、定めた道を踏んでゆくのが誤りなくて宜からうと思ひます。

△人が天地に接しました時は、其の雄大な自然の美にうたれて、一種何とも云へぬ[illegible]を[illegible]します、それは、天地は只打開いて何の秘密もない、而も心ある人が眺むれば、一片の花にも、一滴の露にも、幽玄なる神秘は盛られてゐるのです、即ち其公明正大な心靈の奥にひそまってゐる美の精髓が、深く人の心に浸み込むのです、

△人にも天地のやうな懐かしい人があります、常に發達して、趣味が多方面で心の廣い、眞自然らしく一物に執着心の餘りない人は、之れに接する人をして恰も、自然の美に觸るゝが如く感ぜしめるのです、骨肉近親にのみ厚い一小家庭の人よりも、私は寧ろ社會的で、燃ゆらんやうなる情熱も、物として其の和煦なうぶらざるなき、太陽のやうな人であって欲しいと思ひます。

△自己は單に自己のものではなく、人生の進化向上する爲におかれたる一分子なれば、互に助け合ひ、磨きあって行かればならぬ、各自別々に秘密などあるべき筈でない、自然ながらの心でなければならぬと思ひます。

△若し、人の心が天地の心のやうに美しくならば、宇宙の美の蒼穹に顯はれ、月に、日に星に、花に現はる如く、人の容貌も如何に美しくなりましやう、人工の美は天然の美に若かずと申しますが、磨き上げた心より異彩を放った、純粹の美、心理的の人工美は、如何に貴く見上げらるゝでしやう、人として美を好まぬ人はありますまい、宜しく先づ其心を美にして曇りなき希望にみちた其心の顔に、容に、眼ざしに、さえ渡って輝き寫るやうにあってほしいと思ひます。

△動きなき山の心、滯りなき川の心、萬物を育るゝ廣き天地の心を心として、人も男女の利己的愛情のみならず、老人に、小供に、動物に、草木に、廣く深く其情を及ぼしたいものであります。

●新刊紹介

▲獨立評論(第一號)　山路愛山氏の創刊するもの[illegible]悉く愛山氏一人の筆に成れり、頗る[illegible]名に負ひすと謂ふべし、目次は「東京市政論」「[illegible]」「[illegible]」「現代思想史に於ける基督教の地位」「[illegible]の四」なり、中に就て「社會主義[illegible]」は[illegible]を以て社會主義の歷史と性質とを[illegible]し頗る其要を得たり、愛山氏は決して社會主義に反對する人に非ず、只其運動方法に於て吾人と一致し能はざる點あるのみ(一部八錢、京橋區[illegible])

▲二十世紀の婦人(第二卷第二號)　前號に比し體裁内容ともに大いに整頓せり、[illegible]本號には[illegible](今井歌子)、[illegible](式部)、日本婦人の[illegible]地(輪田真道)、新らしき婦人、[illegible](古依子)、[illegible](埋枯川)等あり(一部十錢、麴町區飯田町五丁目[illegible])

▲新生涯(田口海汀著)　揚州[illegible]たる人物、一貫せる理想、さては奇跡の脚色、總て[illegible]、平俗、常識的の[illegible]なり、實行とは定め[illegible]かるべし、但し[illegible]は昨年の春中大阪每日新聞に連載したるものなり(價五十八錢、本郷區[illegible]金色社)

▲日本美術(七二)　前號に[illegible]美術に志ある者に[illegible]しかるべき雜誌なり、[illegible]樹林[illegible]氏の[illegible]論(佐々木信綱)、論説としての[illegible](幸田露伴)[illegible]等あり、當時名士の[illegible]極めたるあり(價廿錢、[illegible]町日本美術院)

▲新人(六の二)	小石川區[illegible]町	新人社
▲永遠(二の一)	本郷[illegible]	其社
▲[illegible](二)	本郷[illegible]西片町	其社
▲[illegible]功(二の二)	本郷[illegible]八	出版[illegible]
▲[illegible]雜誌(二二七〇)	京橋[illegible]町	其社
▲信州青年(二の五)	信州上[illegible]町	青年社
▲新[illegible](十の二)	北豊島郡巣鴨村	其社
▲[illegible](六の二)	駒込片町	新潟教徒同志會
▲基督教世界(一一一八)	大阪北區中之島	其社
▲[illegible]週報(十六)	小石川[illegible]白台	其社
▲活動の日本(二の二)	京橋[illegible]	隆文館
▲[illegible](九八〇)	神田[illegible]北甲賀町	警醒社
▲[illegible]米[illegible](九の二)	[illegible]三	[illegible]
▲[illegible]評論(一)	[illegible]村	[illegible]
▲白虹(一の二)	岡山[illegible]	血汐會
▲[illegible](九の一)	日本橋[illegible]丁目	丸善[illegible]
▲[illegible](八)	[illegible]北島町	其社
▲[illegible](二八〇)	[illegible]三の一	其社
▲教育時論(七一二)	神田小川町九	開發社
▲[illegible]新聞(二四七)	牛込[illegible]四一	其社
▲經濟[illegible](一三)	日本橋[illegible]一の四	其社
▲法律[illegible](六)	芝[illegible]町	法律顧問會
▲[illegible](二五〇)	京橋[illegible]	合知舍
▲近衛評論(七二)	京都上[illegible]町	其社

平民社に於ける今日の會合

▲社會主義研究會　今十二日午後六時より例の如く平民社樓上に開く、會費金五錢何人にても來會隨意、豫定の講演左の如し

△性慾論…………堺利彦

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

好評 再版

新生涯

田口掬汀君著
百穂君口繪并表紙意匠
菊判三百頁洋装最美本
定價五拾八錢郵税六錢
發行所 東京本郷[illegible] 金色社

家庭雑誌

第三巻第二號（二月二日發行）
▲家族數制限問題（在米、金子喜一）▲家庭者の覺悟（安藤兎毛喜）▲日本女性の同情心（西村渚山）▲スープの話（歸亭主人）▲善きオヂサン（堺枯川）▲内氣なる妻（渚山）▲初春の草花──梅の植込方──椿の移植法──寒葵（園藝欄）▲婦人の政治的要求──義理──子の結婚（讀者願問欄）▲女學校の割烹參觀（石川参太郎）▲此他例に依て記事豐富、皆な本誌の特色を發揮せしむ

定價●一冊六錢●六冊（半年分）三十二錢●十二冊六十錢●郵税不要●見本は郵券六錢

發行所 東京麹町區中六番町十番地 由分社

聖書講義録

隔月發行 毎號菊判 百頁内外

聖書が世界最大の文學にして最高の經典たるは今云ふを待たず、基督信徒と求道者は勿論、苟も道德宗教の事に志あるものは、聖書を座右にせざるもの殆んど之れなきの今日、憾むらくは之が指針となりて其啓導たるものなきを、我等微力を顧ず其缺乏の一部を充さんが爲め同志相謀り茲に本誌を發わす、其内容の如何は今喋々せず、左の目次により其一斑を推想せらるべし

明治卅八年一月二十五日第一號發行

基督傳講義 原田助
約翰傳講義 宮川經輝
舊約全書總論 牧野虎次
以賽亞書講義 日野眞澄
箴言講義 湯淺吉郎

外くに雜録欄には諸大家の聖書研究法、耶蘇の新格言、ハムラバイの法典、日曜學校課程等あり

定價 一部 前金拾八錢外に郵税貳錢
一年分（六部）入拾八錢外に郵税拾貳錢
（注意）前金に非れば一切發送せず

發行所 大阪中ノ島五丁目 基督教世界社

哲學館大學講師 松浦興三松先生編
◉將來之宗教 現代名士卅餘氏述 定價郵税共八拾錢

英文武士道 定價廿錢 郵税四錢

倫敦タイムス紙上に現はれ世界の論壇を賑はしめたる彼の有名なる武士道論を中心とし其他英米第一流評家の武士道論を集めたるものにして戰勝國學生の必讀すべき書也

◉賣捌所 東京小石川原町六 鷄聲堂

ライオンはみがき

赤鑵入
携帯便利
東京 大阪 小林富次郎

麻病せうかち根治神劑

快麻丸

本劑は一等軍醫正草刈先生の處方に據り藥劑師田所繁松調製せし者にて輕きは一週間如何なる難症にても一ヶ月にて根治せしむる特効保證の神劑なり

價●三日分 十五錢●七日分 三十錢●十五日分 六十錢●一月分 一圓
東京市中は即刻配達す●全國無料送達す

發賣 神田區竹川町一番地 電話本局三千四十番 一志堂藥局

傳染病研究所 養生園 東京病院其他各病院御用

專賣特許 アルボース

ペスト、赤痢、コレラ等の傳染病を恐るゝ者は日常アルボース石鹸を使用せよ又しつ、ひぜん、田虫等の皮膚病及霜やけ、垢切れ等の凍傷病一切にも有効なるとの世評高し▲定價原液一斤入金卅五錢通常液一斤入金拾三錢同卅五斤入金二圓▲石鹸大形金拾三錢同小形金八錢

東京深川區東扇橋町五番地 扇橋製藥株式會社
▲賣捌所 全國各藥店小間物店

月刊雑誌 國詩

▲一部七錢 ▲十二部八十錢 ●社外は凡て前金のこと

●第壹號、二月十一日發行●余輩は熱血胸に燃ゆる青年詩人よ來れ、余輩は卿等が火の如き力を待つこと大なり、紅涙つむに餘る女詩人よ來れ、余輩は卿等の如き手の援助を待つて切なり、「國詩」は内容實なき時は大家の作と雖も斥け、實ある時は無名青年の作と雖も喜んで本誌の全部をも犠牲に供すべく、主義の前、情實なく創作の上閥閥なし

發行所 東京下澁谷四二〇 國詩社
大賣捌所 東京麻布區永坂町 草川旭堂

ユニヴアサリスト

▲第三號既刊 半年分（本部）貳拾錢▼

本誌は進歩派基督教の機關、高遠の理想、純潔なる信仰の上に立ち、在來基督教の知し能はざる科學宗教調和の福音を宣傳し高等批評的研究によれる痛快切實なる聖書の解釋を試み、論說、講演、家庭、其他の諸欄趣味津々たるものあり。

發行所 名古屋市東片端町二 世光社

男女生殖器病專門 内科外科 浜紅醫院

院長醫士一瀬鷹一 東京神田連雀町十八 電車萬世橋下
診察無料藥術料任意

活版印刷

東京築地
株式會社 國光社
電話新橋二六九三番
特電話八八番

●神經衰弱 遺精早漏陰萎勃起力記臆力衰退手淫の害
●陰莖包皮無痛速治療法
●梅毒●りん病●痔疾
●婦人科●せうかち●子宮病●血の道●月經不順
●地方患者は返信料添へ申込む可し

東京市神田區西今川町三番地 愛生醫院

瓦斯製造工場

昨春來橋場第二製造所へ增設中の瓦斯製造工場竣工製造力倍加仕候に就ては近來石炭其他の原料品暴騰致候に拘らず精々勉强仕り諸事御便宜を旨とし又瓦斯器取附工事は一層敏活且低廉に御用辨相成候樣致候間何卒御下命奉願上候

●瓦斯器取附は電話、はがき又は口頭にて御申込被下候はゞ早速社員相伺ひ工事費見積書呈上可仕候

●瓦斯燈 白熱燈は五十燭光以上を有し一時間の瓦斯代僅に九厘餘にして光力無比且最德用の燈火なり
●瓦斯竈 本社發明の專賣特許品にして二升の飯を炊ぐに瓦斯代僅に一錢八厘にして輕便且德用なり
●瓦斯七輪 晝夜何時にてもマッチ一本にて煮物湯沸牛乳を温むるなど即座に用を便し木炭よりも廉なり
●瓦斯煖爐 火力は自在に加減せられ安全淸潔は云ふに及ばず客室居間用煖爐として最も輕便德用なり
●瓦斯機關 原動力用として輕便德用之れに及ぶものなく小は半馬力より大は數十馬力あり
●瓦斯器陳列所 本社内、上野商品館内、銀座二丁目 縱覽御隨意

東京瓦斯株式會社 神田區錦町 電話（本局）一三番、二三〇三番 下谷四八番

◉書籍取次販賣（郵税共）

●社會問題解釋法（安部磯雄著）一圓廿錢
●社會主義神髓（幸德秋水著）三十錢
●廿世紀之怪物帝國主義（同上）廿五錢
●百年後の社會（平井廣五郎譯）六十錢
●小說勞働問題（堺枯川譯）卅五錢
●社會主義概評（島田三郎著）三十錢
●社會黨（西川光次郎著）十五錢
●カール、マルクス（同上）十錢
●破帝國主義論（山口義三著）廿五錢
●產業組合手引（綠遊選平編）二十錢
●青年と生存競爭（安部兎毛喜著）二十錢
●家庭の新風味（堺枯川著）一圓
●家庭夜話（同上）一圓
●枯川隨筆（同上）二十錢
●我家の犬猫（同上）八錢
●我宗教（トルストイ著 加藤直士譯）七十錢
●トルストイ翁日露戰爭論（平民社譯）八錢

取次所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社

▲本紙定價 一部三錢五厘、廿部前金六十五錢 五十部前金一圓六十錢、郵税不要
▲廣告料 一行十九字詰三十錢
▲注文 は總べて前金に限る
▲郵券代用 にて御送金の場合は必ず一割増とし成るべく五厘の切手を用ひられたし

發行兼編輯人 原眞一郎
印刷人 山田金市郎
發行所 東京府荏原郡入新井村字新井宿二五五七番地 直行社
發賣所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社
印刷所 築地二丁目二十一番地 株式會社國光社 電話新橋八八、新橋二六九三番

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY